

フランス風クーラントの特徴的な拍子構造について ——18世紀前半の舞踏資料に基づく考察——

赤塚健太郎

2拍子と3拍子の交代はバロック時代のフランス風クーラントのもっとも重要な特徴の1つと考えられてきた。確かにこの舞踏、舞曲は曖昧なリズムを示し、演奏者を戸惑わせる。しかし18世紀の舞踏書や舞踏譜を詳しく検討すると、クーラントの曖昧な拍子が実際の舞踏の動作に対応していることが明らかとなる。

最も一般的なクーラントの踊り方は、パ・ド・クーラントと呼ばれる基本的なステップ単位を繰り返すことである。舞踏書によると、このステップ単位は2つのステップから構成される。最初のステップは3拍目に遂行され、2つ目のステップは次の小節の1拍目と2拍目を占める。こうしたクーラントの踊り方はクーラント・サンプル *courante simple* と呼ばれていたが、クーラント・サンプルの舞踏譜の中には1つの伴奏旋律が残されている。この伴奏旋律はある基本的なリズム・パターンの繰り返しによって構成されている。従ってパ・ド・クーラントの動作と、この伴奏旋律のリズム・パターンとを比較することで、クーラントにおける舞踏と音楽の関わりを知ることができる。

このクーラント・サンプルの旋律では、3拍目に常に付点四分音符が現れる。この音符はパ・ド・クーラントの最初のステップに対応しており、この拍からステップ単位が始まるということを示唆する。一方、1拍目には長い音符が置かれ、さらにこの音符には2拍目にかけて順次進行が続く。この旋律の動きは、2つ目のステップの堂々とした性格を強調する。このステップは長いすり足で、いつ終わるのかはっきりしないものである。従って伴奏旋律も2拍目を明瞭に示さず、果てしなさを表現するのだ。そしてこの2拍目の不在によってクーラントの曖昧な拍子が生み出されるのである。